



TITLE:

京大広報 No. 595

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 595. 京大広報 2004, 595: 1787-1802

ISSUE DATE:

2004-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196503>

RIGHT:



# 京大広報

No. 595

2004. 11

## 目次

### 大学の動き

尾池総長，入倉副学長が AEARU 第10回総会・  
第15回理事会に出席.....1788

平成16年度「法科大学院等専門職大学院形成  
支援プログラム」の採択結果.....1789

平成16年度「現代的教育ニーズ取組  
支援プログラム」の採択結果.....1790

部局長の交替.....1790

日誌 .....1790

### 部局の動き

京都大学 / ユネスコ / 国際斜面災害研究機構・  
UNITWIN共同計画本部棟開所式典.....1791

生存圏研究所が「第5回国際木質科学  
シンポジウム」を開催.....1792

### 寸言

サラリーマンピアニストの一言  
石動正和.....1793

### 随想

同窓会 名誉教授 橋本健治.....1794

### 洛書

ミノムシの蓑 澤田安樹.....1795

### 話題

附属図書館が「学術情報・電子ジャーナル  
シンポジウム」を開催.....1796

京都大学未来フォーラム（第5回）を開催...1796

宇治キャンパス公開2004を開催.....1797

吉田南構内へコンビニエンスストア導入.....1798

計報 .....1799

### お知らせ

能楽鑑賞会.....1800

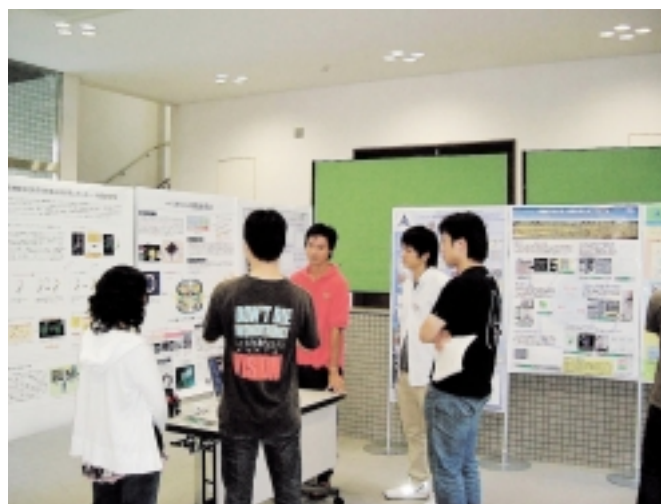
化学研究所 第104回研究発表会 .....1800

### 公開シンポジウム

「21世紀の不安とあやかし」.....1801

再生医科学研究所平成16年度学術講演会.....1802

編集後記 .....1802



## 大学の動き

### 尾池総長，入倉副学長がA E A R U第10回総会・第15回理事会に出席

尾池和夫総長と入倉孝次郎副学長が10月6日～9日に台湾で開催されたA E A R U (The Association of East Asian Research Universities) 第10回総会及び第15回理事会に出席した。



AEARU 第10回総会に出席中の尾池総長(10月8日)

この総会(年1回秋に開催)には、A E A R U加盟17大学の学長・副学長はじめ関係者38名が参加し、会議では、今回が初めての参加になる尾池総長が冒頭で紹介された。

続いて、昨年度及び今年度で開催された事業についての実施報告があり、併せて来年度開催予定のワークショップなどについて紹介があった。

なお、本学が次回理事会(平成17年5月開催予定)を招致することについて提案し、了承された。

総会に引き続き理事会(構成: 中国科学技術大学、



AEARU 第10回総会・第15回理事会の出席者と(10月8日)



国家地震工程研究中心での意見交換風景(10月9日)  
韓国科学技術院、香港科技大学、国立台湾大学及び本学の5校)が開催され、A E A R U加盟校による体育大会についての提案及び加盟校拡大について討議がなされた。

なお、A E A R U総会の前日には、フォーラム "Achieving World Class Status" が開催され、台湾の高等教育の現状などについての紹介と高等教育についての討議が活発になされた。

尾池総長と入倉副学長は、A E A R U会議の翌日、国家地震工程研究中心(N C R E E)及び国家災害防救科技中心(N C D R)を訪問し、意見交換を行った。

詳細は総長室ホームページをご覧ください。

[http://www.kyoto-u.ac.jp/uni\\_int/01\\_sou/041006.htm](http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/01_sou/041006.htm)

A E A R Uの活動については、以下のホームページをご覧ください。

- ・京都大学のA E A R Uに関するホームページ(日本語)

<http://www.kyoto-u.ac.jp/kokuryu/>

[international\\_union/aearu/INDEX.HTM](http://international_union/aearu/INDEX.HTM)

- ・A E A R U公式ホームページ(英語)

<http://www.aearu.ustc.edu.cn/>

## 平成16年度「法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム」の採択結果

社会経済の大規模な構造変化や国際競争の激化に伴い、国際的視野と高度な専門職業能力を有し、社会の各分野において指導的役割を担うことのできる人材の育成が求められることから、平成15年度に実践的な教育を行う専門職大学院の制度が創設された。

これを受けて文部科学省が平成16年度からの新規事業としておこなう法科大学院等専門職大学院形成支援プログラムの初めての採択結果が発表された。これは、優れた教育の実践を目指す法科大学院や専門職大学院を選定して、財政的に支援することにより教育内容の充実を図ろうとするもので、ひいては当該大学院のみならずその他の大学院が、選定されたプロジェクトを参考にして教育内容の充実を図ることにより、我が国の国際競争力の強化・向上に資することを目的としている。

本年度は、教育の高度化による制度の発展を目的とした特色ある教育プロジェクトを募集する「教育高度化推進プログラム」と実践的な教育の推進を目的とする「実践的教育推進プログラム」の2分野に国公立の大学院84校から計127件のプロジェクトが申請され、うち63件が選ばれた。

本学からは法学研究科法曹養成専攻の2件と医学研究科社会健康医学系専攻の1件が選定された。

このうち、「教育高度化推進プログラム」で採択された「実務基礎教育の在り方に関する調査研究」は、本学法学研究科が申請代表大学となり、計10大学が参加する共同プロジェクトである。理事・副学長の田中成明法学研究科教授を責任者として、各大学所属の22名の事業推進担当者が中心となり、法科大学院における実務基礎教育に関し、法律基本科目との関係、事実認定教育の方法、臨床系教育をめぐる問

題、司法修習との関係等の諸課題について、調査、研究を行うものである。

「教育高度化推進プログラム」の単独教育プログラムとして採択された同じく法学研究科法曹養成専攻の「実践的理論教育高度化プロジェクト」は、最新の実務的課題や問題状況をリアルタイムに理論教育の中に反映させ、また、最先端の分野について新たな科目の開発を試みるとともに、リーガル・クリニックやエクスターンシップといった実践的科目及びその延長線上にある科目を充実・発展させることにより、法曹に求められる実践的理論能力の涵養に向けた、より高度な教育方法を開発しようとするものである。

また、「実践的教育推進プログラム」の単独教育プロジェクトとして採択された医学研究科社会健康医学系専攻の「臨床研究者養成プログラム」(Master of Clinical Research (MCR))は、医師、歯科医師免許所有者を対象に社会人の臨床家に焦点を絞った1年制の特別コースを開設した。臨床現場で生じた様々な疑問に応えるための科学的な臨床研究の計画立案、実施、解析、結果の解釈などに関して、カリキュラムを提供する我が国初めての試みである。

このコースでは、少人数授業、実データを用いた解析実習と双方向性の議論を行いながら、1年で卒業要件である臨床研究のプロトコル作成、又は2次データ解析による出版可能な論文作成を目指す。また、各学生には、入学時に最低1～2名の専任担当教員(メンター)を充て、本コース修了後も研究実施、結果解析、論文作成まで継続的に指導することを特色とする。

平成16年度「法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム」の採択一覧

| 分 野                            | 研究科専攻名等              | プロジェクト名称           | 事業推進責任者        |
|--------------------------------|----------------------|--------------------|----------------|
| 「教育高度化推進プログラム」<br>(共同プロジェクト)   | 法学研究科<br>法曹養成専攻 他9大学 | 実務基礎教育の在り方に関する調査研究 | 法学研究科<br>田中 成明 |
| 「教育高度化推進プログラム」<br>(単独教育プロジェクト) | 法学研究科<br>法曹養成専攻      | 実践的理論教育高度化プロジェクト   | 法学研究科<br>中森 喜彦 |
| 「実践的教育推進プログラム」<br>(単独教育プロジェクト) | 医学研究科<br>社会健康医学系専攻   | 臨床研究者養成プロジェクト      | 医学研究科<br>福原 俊一 |



## 平成16年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の採択結果

平成16年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に本学から申請した「国際連携による地球・環境科学教育 - アジア地域の大学との同時進行型連携講義の構築と実践 - 」が採択された。

このプログラムは、各種審議会からの提言等、社会的要請の強い政策課題に対応したテーマ設定を行い、各大学等から応募された取組の中から特に優れた教育プロジェクト（取組）を選定し、財政支援を

行うことで、高等教育の更なる活性化が促進されることを目的とするものである。

本取組は、地球・環境科学についての「同時進行型連携講義」を本学工学研究科とマラヤ大学（マレーシア）、清華大学（中国）が共同で開設するものであるが、将来的にはアジア地域における教育連携ネットワークの構築を目指すものである。

| テーマ名                 | 取組名称   | 取組の期間             | 取組担当者             |
|----------------------|--|-------------------|-------------------|
| 他大学との統合・連携による教育機能の強化 | 国際連携による地球・環境科学教育 - アジア地域の大学との同時進行型連携講義の構築と実践 - | 平成16年度～<br>平成18年度 | 工学研究科<br>荒木光彦研究科長 |

## 部局長の交替

### 大学文書館長

藤井讓治文学研究科教授（歴史文化学専攻日本史学講座担当）が、佐々木丞平大学文書館長の任期満了に伴う後任として、11月1日付けで任命された。任期は平成18年10月31日まで。



## 日誌 2004.9.1 ~ 9.30

- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 9月6日 役員会             | 21日 役員会（役員懇談会のみ）    |
| 7日 部局長会議             | " 教育研究評議会           |
| 9日 全学教育シンポジウム（10日まで） | " 施設整備委員会           |
| 13日 環境・安全・衛生委員会      | 22日 大学入試センター試験実施委員会 |
| " 役員会                | 24日 学位授与式           |
| 14日 図書館協議会           | " 全学共通教育システム委員会     |
| 15日 国際交流会館委員会        | 27日 役員会             |
| " 国際交流委員会            | 28日 教育制度委員会         |
| 17日 入学者選抜方法研究委員会     | 29日 財務委員会           |

## 部局の動き

## 京都大学 / ユネスコ / 国際斜面災害研究機構・UNITWIN 共同計画本部棟開所式典

## 1. 京都大学 / ユネスコ / ICL の UNITWIN 共同計画

地すべりは、都市域あるいは都市化域において住宅地域や、時として文化遺産・自然遺産や、その他の人類にとっての脆弱な資産も壊滅させる。UNESCO 教育局が推進する UNITWIN (University twining and networking) 計画の一環として、21世紀に入ったばかりの現在最も必要とされている斜面災害危険度軽減のための研究・教育・人材育成を目的として平成15年3月に京都大学 / ユネスコ / 国際斜面災害研究機構による UNITWIN 共同計画「社会と環境に資するための斜面災害危険度軽減」の協定が締結され、平成16年1月に本学百周年時計台記念館において本部設立記念式典が開催された(京大広報 No.590)。

## 2. UNITWIN 本部開所式典

上記 UNITWIN 共同計画を推進するため、本学の平成15年度総長裁量経費と ICL の特別予算を用いて、UNITWIN 本部棟(写真1)を本学内に設置し、その開所式典を平成16年9月3日に開催した(写真2)。式典では、尾池和夫総長、井上和也防災研究所長が歓迎挨拶を述べ、来賓としてユネスコ副事務局長代理のエダー地球科学部長、ルーバン防災課長、ゴードン高等教育局国際協力課長、文部科学省国際統括官代理の秋山和男ユネスコ協力官、中村隆行地震防災研究課防災科学技術推進室長、西川 智内閣府災害予防担当参事官、ヒンケル国連大学長(国連事務次長)、マキアベロ駐日ペルー大使、イタリア大使代理のヴィタ文化担当書記官が祝辞を述べた。

式典の最後に、佐々恭二教授が防災研究所において実施してきた諸外国との共同研究の成果、それを踏まえた国際斜面災害研究機構の設立と防災研究所斜面災害研究センターの設立、および UNITWIN 計



画発足とマチュピチュ遺跡等での活動の他、現在までの活

写真1  
宇治構内に完成した  
UNITWIN 本部棟。

動状況と将来の活動の方向性について講演した。

また、式典に先立ち、尾池総長が UNITWIN 本部棟に寄せて「国際」と「地すべり」を題に作った俳句「地すべりの地やアンデスに二日月」の色紙とマチュピチュ遺跡の写真を用いて作成したパネル(写真3)の除幕式も行った(写真4)。

(防災研究所 斜面災害研究センター)



写真2 UNITWIN 本部棟開所式典出席者による記念写真。

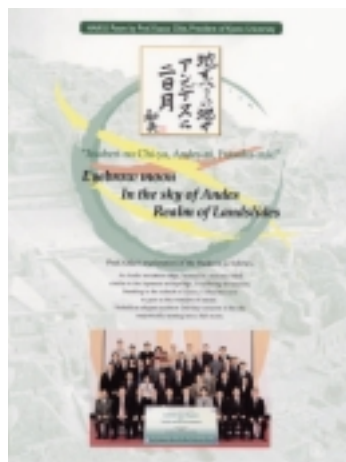


写真3  
尾池総長作・揮毫の色紙とマチュピチュ遺跡の写真、および本年1月の UNITWIN 本部設立記念式典の記念写真を用いたパネル。



写真4 パネルの除幕式。左から佐々防災研教授( ICL 会長)、尾池総長、マキアベロ・駐日ペルー大使、エダー・ユネスコ地球科学部長。

## 生存圏研究所が「第5回国際木質科学シンポジウム」を開催

生存圏研究所では、日本学術振興会の拠点大学方式学術交流事業の一環として「第5回国際木質科学シンポジウム」を9月17日（金）～18日（土）の間、百周年時計台記念館で開催した。

この事業は、平成8年度からインドネシア及びマレーシアとの共同研究並びに研究者交流により国際学術交流を推進する目的で開始され、今年度で9年目を迎えた。参加者は国内約160名、国外約50名（インドネシア、マレーシア、タイ、フィリピン）であった。

初日のオープニングセレモニーでは松本 紘生存圏研究所長の歓迎の挨拶の後、インドネシアと日本を代表して、エンダン スカラ インドネシア科学院生命科学部門長と今村祐嗣生存圏研究所教授がそれぞれ挨拶を行った。また、生存圏研究所とインド

ネシア科学院生物材料研究センターとの間で一層の科学協力を推進するために、相互科学協力に関する覚書の調印を行った。その後、熱帯森林資源の持続的な生産と効率的な利用を統一テーマに、熱帯森林資源の材料利用、バイオマス変換化学、生命科学、環境科学等の分野横断的・学際的研究の視点から発表および活発な討論が行われた。

2日目には、遠藤洋路日本学術振興会地域交流課長より事業についての説明も行われ、参加者一同、新たな国際共同研究への意気込みを相互に確認した。

また、初日シンポジウムの後のバンケットでは、本事業参加者が一堂に会して、インドネシア、日本双方で趣向を凝らした出し物を披露し合うなど、心のこもった親睦の場となった。

（生存圏研究所）



開会の挨拶をする松本所長



日本学術振興会の事業説明をする遠藤課長



研究発表風景



## 寸言

## サラリーマンピアニストの一言

石動 正和

目標を予件とし、達成への効率のみを追求する時代は終わったと言われて久しい。しかし、では何を新たな目標に立てれば良いのか。その答えを見出すのは決して容易ではない。

サラリーマンとなり20年を経た頃、偶然にもその機会は訪れた。1995年1月の阪神淡路大震災である。一瞬にして数千人の命を奪った大地震。以前の職場は被災地神戸にあり、及ばずながら復旧の手助けも経験した。ピサの斜塔のように傾き片膝ついたビル、焼け野原となった商店街、犠牲者を弔う瓦礫の山を這う線香の煙。全て信じ難い光景の中で、初めて死のリアリティを感じたとき、私の中に眠っていたものが目を覚ました。

父は音楽教師であり、オルガンや蓄音機など一定の音楽環境があった。現在からすれば必ずしも早くはないが、父の手ほどきを経て10歳頃よりピアノの先生にもついた。京都大学入学当初は、大学紛争の真っ只中でしばらく授業もなく、偶然入部した京大合唱団のBOXに通う毎日だった。ピアノが弾けることで、連日のように多数の曲を伴奏した。当時の私にとって先輩方の要求レベルは高く、多くは初見であった。この経験により、私のレベルは飛躍的に高まったと思われる。

サラリーマンになって間もなく、念願のピアノを購入したとき、ともかくも弾けるレパートリーを洗い出してみた。その数200、一晚のプログラムを組み立てるに充分過ぎる数である。しかし、人前に立つには、まだ何かが足りなかったのである。

1995年、あの大震災の年のクリスマスイブの日、今は亡き京都大学の先輩が建てられた神戸の小ホールで、私の最初のピアノリサイタルは催された。ホール周辺は震災の爪跡が生々しく、来場者の中には被災者も多かった。何か切迫した雰囲気を感じながら、私は演奏を続けた。プログラム最後のリスト「オーベルマンの谷」の演奏に、私は、復興する神戸に捧げると述べた。音楽は美しい。しかも不幸な中で一層美しいと言われる。演奏後、最前列に座っ



2003年8月10日 ポストンにて（左・小沢征爾氏と）  
た年配の女性の目には涙が浮かんでいた。

2000年ヨーロッパ演奏旅行は、京都大学の後輩の全面的サポートにより、また、2002年関西を代表する「いずみホール」でのリサイタルは、同じく先輩のお口添えにより、更に、2003年、始めてプロの演奏家との東京でのコンサートは、やはり先輩であるフルート奏者との共演により実現したものであった。

今年6月、京都大学より、時計台百周年記念ホールにおける第1回 Clock Tower Concert に出演を依頼された。4月の法人化スタートの中で、滝川事件など京大の歴史が濃く刻まれた法経1番教室跡に、学内外の出会いを図る場として設立された新ホールである。大学関係の方を中心に350名が来場され、オール・ラヴェル・プロを聞いて頂いた。舞台背景は全面ガラス張りであり、演奏とともに次第に辺りの景色が暮れて行く様子がうかがえ、これが、アンコールのドビュッシー「月の光」に良く合っているように思えた。このコンサートでおよそ40回を迎えたことになる。

その昔、京都大学で学んだことは何だったか？  
それは、与えられた目標だけでなく、自ら見出した目標に向かい「感動を求めて」生きることではなかったかと思う。サラリーマンピアニストを生み出したその機会は、長い潜伏を経て突然やって来たのである。

（いするぎ まさかず（株力ネカより塩ビ食品衛生協議会へ出向、常務理事 昭和48年工学部卒）



## 随想

## 同窓会

名誉教授 橋本 健治



小学校から大学まで、いろいろな同窓会の案内が届く。今年は高校卒業、大学入学から50年になるので、記念の同窓会が幾つか開かれた。京大工学部に入学して宇治分校に通ったときのクラスでは、T-1会と称する同窓会が卒業以後も活発である。当時の教養部のクラスは学科別編成ではなく、各学科の学生の混合であり、卒業後も幅広い分野の友人との交流が続いている。入学40周年のときは、宇治キャンパスを訪ね、黄檗山萬福寺で精進料理を味わい、文集も発行された。今年のT-1会は、4月初めの3日間にわたり、ゴルフ、桂キャンパスの見学と講演、宴会、京都観光と盛りだくさんの企画であった。全国から同窓生35名と夫人20名が参加し、和やかな雰囲気の中で京都の春を楽しむことができた。このように同窓会が継続していくには、小まめに世話をしてくれる幹事役の存在と、日頃からの会員間の繋がりが重要である。最近はインターネットの利用により同窓会の案内・連絡も随分と便利になったが、行事の企画、会員への案内状の発送と整理、各イベントの運営、文集編集となると、かなりの仕事量になる。T-1会では、京阪神と東京に近辺の会員が定期的に集まり旅行を楽しむなど、日頃の同窓生の連絡と意思疎通が図られており、いざというとき仕事がスムーズに進められる。

かつて、筆者が所属していた化学工学教室は、昭和15年に創立され、卒業生の総数は2,300名にも達している。教室には「洛窓会」という同窓会があり、毎年京都で総会を開き、「化学工学教室・洛窓会の動き」と題する150ページほどの冊子を会員に配布し、名簿も2年ごとに発行している。会の雑務はすべて教室の先生方をお願いしている。現在、会長をつとめているが、いくつかの課題がある。そのひとつは、会員の生活圏が全国的に分散しており、京都での洛窓会総会に参加する会員が限られている点である。

もう一つは、会員の年齢構成が、80歳代から20歳代までと幅広く分布し、生活環境と興味が多様化しているという点である。リタイヤして、興味は技術や学問から趣味・健康にある人達、日々の仕事に追われている人達、同窓会というものに未だ馴染めない若い人達などがいる。このように多様な会員のすべてに満足いくような運営はなかなか難しい。

以前から東京に「東京洛窓会」という同窓会があり、会社単位の輪番制で講演会と懇親会が開かれ、教室からも数名の先生方が招待され、講演も行ってきた。京都での総会に出席できない卒業生にとって、教室の現状を知り、先生方とも会えるよい機会であった。しかし、会に参加するのは現役の人が多く、退職した人達は気楽に趣味や旅行を楽しむ会を作られるようになった。その一方で、最近では東京本社周辺に集まる卒業生が減少し、幹事役が多忙であったりして、東京洛窓会はここ数年開催されなかった。しかし、東京地域には全会員の1/3以上が居住しており、卒業生の集まりをもう一度復活したいと、本部と東京側が相談を重ね、1年前に復活することができた。そして本年、「洛窓会東京支部」として再出発することが提案され、最近開催された京都での総会でその設置が決定された。会の運営はいくつかの幹事会社の輪番制にするが、OBの人達にも積極的に参画してもらい、会を運営することになった。遅まきながら支部予算も正式に計上することになった。このように、会員へのサービスを充実し、幅広い世代に受け入れられる同窓会にしたいと願っている。大学と社会との繋がりの重要性がいわれるいま、同窓会は両者の最も身近な接点であり、その活用が望まれる。

(はしもと けんじ 元工学研究科教授 平成11年退官、専門は反応工学)

## 洛書

## ミノムシの蓑

澤田 安樹



4月に京大の教職員仲間に加えていただいた。独立法人化直後の異動で、何かと珍しいことづくめであった。3月末に事務の方が辞職願の用紙を持ってきて、書けと言う。「えっ、辞職願ですか？何も悪いことしてないのに。」と思わずギョッとしてしまったが、国立大学を移動する場合でも、それぞれ独立した組織になるので、まず東北大を辞職して、次に京大に採用されることになるとの説明であった。本当に採用されるのかしらと不安に思いつつ書いたが、そばで聞いていた同僚も真剣な眼差しで「退職金はどうなるの？」などと世知辛いことを聞く。書類や手続は変わったが、当面実質的なことは何も変わらないという説明であった。しかし、大変貌の第一歩という予感がする。

5名の院生がいたので、「いっしょに京都へ行くか？」と聞いたところ、「学位論文を書くための研究をしなければならないので、先生ひとりで行ってくれ。」と冷たいことを言う。彼らの研究を遂行するためには、実験装置もしばらく置いておかなければならない。書籍もまた彼らが論文を書くために置いておく必要がある。女房まで「仕事があるから、あんた独りで行ってくれ。」と言う。京都の借家を世話してくれた不動産屋が「ご上洛のおりには」などという仰々しい手紙を寄越すので、ついつい上洛を果たした織田信長か木曾義仲にでもなったような気でいたのが、クロネコの単身パックひとつのなんと哀れな「ご上洛」となった。

女房はともかく、学生の判断は正しく、室と一体化している実験装置を移動させると最低1年は空白期間が生じてしまう。ならば、たいして頼りにならない先生にくっついていくよりは、空白期間を作らずに実験を継続した方がよい。東北大の計らいで、実験装置の大半は、院生の研究が済みしだい京大へ移動することになっている。現在のところ、周りに

実験装置も資料もなく、その結果、研究に類することが京大ではほとんどできない状態である。人が訪ねて来ても、「これが私の研究です。」と言って案内する所もない。半年後には、このような状況から脱することになると思うが、書籍や研究装置をまとめて初めて研究者なんだとつくづく実感する。それらをまとっていない現状は、ミノムシが蓑をまとっていないようなもので、ただの芋虫状態、何とも心許ない。

法人化後、各国立大学の損得意識が前面に出て、研究者が他大学へ異動する際、科研費等で苦勞して買い集めた研究装置を置いていくよう強制される場合もあると聞く。実験システムをバラバラにして学内の他の研究者に配ったのでは、装置の機能がじゅうぶんに発揮されない。装置はそれぞれ研究目的に合わせた特徴を持っていることが多いので、同じ研究を引き継ぐ後継者がいなければ、やはり購入した研究者が異動先へ持って行って使うのが最も装置の機能を引き出すことになる。それよりも研究装置を置いていくことになると、研究の継続が難しくなる。その結果、移動を躊躇する研究者が続出することになり、人事交流が停滞してしまうのではないかと懸念する。このままでは各大学の損得意識が優先してしまうので、国全体の科学の発展を考えた国段階でのルール作りが必要に思える。蓑を剥がされては、研究者は冬を越せず死んでしまうと思うのだが……。

(さわだ あんじゅ 低温物質科学研究センター教授 専門は低温物理学)



## 話題

## 附属図書館が「学術情報・電子ジャーナルシンポジウム」を開催

附属図書館では、9月16日に国立情報学研究所と共催で、「大学における学術情報資源の整備 - 電子ジャーナル時代の学術コミュニケーションの変革 - 」と題した公開シンポジウムを時計台記念館・百周年記念ホールにて開催した。

本シンポジウムは、学術コミュニケーションの改革をめぐる国際動向とわが国における対応に関する理解を深めることにより、電子ジャーナルをはじめとする学術情報基盤整備にあたっての課題を確認し、その解決策を見出すことを目的に企画した。基調報告者として、国立大学図書館協会電子ジャーナルタスクフォース主査を務める伊藤義人名古屋大学附属図書館長、同協会国際学術コミュニケーション委員会の尾城孝一課長（千葉大学）および国立情報学研究所国際学術情報流通基盤整備事業推進室長の安達

淳教授の3名から最新の状況に関して紹介があった。続いてパネル討議として第1部「大学における学術情報資源の整備の進め方 - 京都大学の場合 - 」、第2部「学術コミュニケーションの変革へのかかわり - 研究者、学会、出版社 - 」の2つのテーマで、学内の諸課題の紹介から、国内外への研究成果の発信にあたっての学会や編集委員会の役割の重要性、学術コミュニケーションの変革にあたっての研究者の役割などに至る多くの課題に関し、出版社も交えたパネリストによる熱心なディスカッションが展開



された。

シンポジウムには金田章裕副学長（図書館担当理事）をはじめ、図書館協議会協議員などの教員や図書館職員のほか、近畿地区等の国公立大学、国立国会図書館関西館など60近くの機関から約180名が集い、長時間のプログラムにも関わらず、熱心に報告・討議に耳を傾け、また質疑に参加した。

基調報告、パネル討議とも参加者から、分かりやすかった、以前から是非聞きたかった内容で良い機会だった、教員としてこれまで全く認識していなかったのが大いに役立つ内容だった、など、アンケートにはきわめて高い評価が寄せられた。

ホームページもご覧ください。

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/symposium/index.htm>

（附属図書館）

## 京都大学未来フォーラム（第5回）を開催

本学では、大学と社会との協力・連携を一層深めるため、企業や官庁、国際機関、N G O、大学・研究機関、マスメディア、文化・芸術など様々な分野で活躍する卒業生などを迎えて、講演と意見交換を行う京都大学未来フォーラムの第5回目を、時計台記念館・百周年記念ホールにおいて9月29日夕刻に開催した。

今回は、理学部を卒業後、京都大学教授、岡崎国

立共同研究機構基礎生物学研究所所長、同機構長、国際生物科学連合副総裁、J T生命誌研究館館長などを歴任され、現在は、J T生命誌研究館特別顧問として活躍されている岡田節人氏を講師に招き、「生命のありよう」と題して講演が行われた。

講演では、生命科学者として紹介される機会が多いなか、ご本人から「厳密には生命科学をやったことはなく、生物科学をやっていた。」と紹介された。



「生命科学」という言葉自体も成り立つのか、「生命という普遍的な存在」を考える生命科学と「生物という個別的な存在」を考える生物科学の立場の間には矛盾があるのではないかと考えておられることを述べられた。例えば動物の再生や脳の研究に利用されている「プラナリア（渦虫）」のように、切っても切っても同じように成長し「生と死の区分もさだかでない」など、生命としての単調さを有する生物や、甲虫のように環境が異なるだけで紋様が違う多様性を有する生物が存在することについて、最大の矛盾が実態として統一されているのが生物の世界の面白さであることを語られた。

当日は台風接近という悪条件の中、聴講した学生、教職員、一般市民の方々約190名は講演に真剣に聞



き入り、講演終了後は参加者から、クローンの定義や、生物学の意味など熱心な質問が相次ぎ、有意義なフォーラムとなった。

## 宇治キャンパス公開2004を開催

去る10月1日（金）、2日（土）に「第8回京都大学宇治キャンパス公開2004」が開催された。

今年で8回目を迎えた宇治キャンパス公開は、本年4月、木質科学研究所と宙空電波科学研究所が統合して誕生した生存圏研究所を含む宇治地区にある4研究所、図書館宇治分館及び宇治地区に研究室を置く研究科等並びに防災研究所宇治川オープンラボラトリーが参加して行われた。今回は「住みよい地球を創る科学」を統一テーマに、各研究所等の研究活動を一覧できる総合展示、実験や観察を体験できる公開ラボ、公開講演会が行われた。また、日程については10月1日（13:00～16:30）、2日（9:30～16:30）の2日間にわたり実施した。参



加者は、1日は約100名、2日は早朝から雨にもかかわらず約400名、宇治川オープンラボラトリーでは約80名、計580名の参加を得た。

総合展示では、各研究所等から詳細な説明が行われ、公開ラボでは、参加者が超高分解能分光型電子顕微鏡を通して、ナノメーターサイズの世界を体験するなどの大型機器設備を用いた実験が行われた。公開講演会では、「世界遺産を地すべりから守るために」（防災研究所 佐々恭二斜面災害研究センター長）、「環境にやさしいエネルギーを創る材料科学」（エネルギー理工学研究所 檜木達也講師）、「時計で大気環境モニター：精密衛星測位による地球環境監視」（生存圏研究所 津田敏隆教授）と題して講演が行われ、最新の研究成果をわかりやすく解説し、好評のうちに終了した。キャンパス公開に先立ち構内を整備し、樹木に名札を掲げ、樹木観察会も行い参加者には大変好評であった。

今後も宇治地区で行っている最先端の研究を広く公開し、地域とともにより一層開かれた大学をめざし、産学連携の推進も諮っていきたい。

（京都大学宇治キャンパス公開2004実行委員会）

## 吉田南構内へコンビニエンスストア導入

本学は、京大生協がこれまで全面的に担ってきた吉田南構内における福利厚生事業に民間活力を導入し、学生及び教職員から要望の多かった長時間営業、土日祝祭日の営業、ＡＴＭ及びマルチメディア端末の設置、公共料金や宅配便の取扱いなど、学生・教職員への一層の利便性の向上、サービス面の充実を図るため、吉田南総合館北棟地下へコンビニエンスストアの導入を決定した。

コンビニエンスストアの導入にあたっては、コンビニエンスストア各社と折衝を重ね、最終的に出店を希望した３社の提案内容について総合的に評価した結果、(株)ローソンを導入業者に決定した。特に営業日数の多さ、マルチメディア端末を利用した各種サービスの豊富さ、それを利用した受験生等

へのサービス提供、郵便局機能、を高く評価した。また、同社が東京圏でのみ実験的に展開している健康と環境に配慮した商品展開を特徴とする「ナチュラル・ローソン」のコンセプトをもった店の提案があったことも、決定に至った大きな理由の一つである。本学での店舗は、学生への利便性にも配慮し通常の商品と混在した品揃えとなるが、環境憲章を謳っている本学としては話題性にも富み、理念に沿った提案として評価した。

これまで本学が行ってきた各種事業の取り組みのなかで、今回のような民間活力による競争の原理の導入は初めての試みであり、法人化後の大学運営（経営）のさらなる活性化が期待できる。

### 『営業内容』

- １）店 名：ナチュラル・ローソンセクション京都大学店
- ２）営業開始日：平成16年12月6日（月）（予定）
- ３）営業日数：359日（定休期間：年末年始）
- ４）営業時間：7：00～21：00
- ５）売場面積：182.73m<sup>2</sup>
- ６）店舗面積：239.43m<sup>2</sup>
- ７）販売商品：食品，日用品，文具，雑誌等  
（ナチュラル・ローソンセクションとして、環境保護のための商品，無添加商品等，環境に優しいコンビニを目指す。）
- ８）カウンターサービス  
公共料金の代行収納（電気，ガス，水道，通信販売，クレジット等）  
ＤＰＥ，コピー（カラーコピーを含む。），ＦＡＸ  
各種チケット販売  
郵便局機能（ポスト設置，切手・葉書・印紙の販売，ゆうパックの取扱い）
- ９）ローソンＡＴＭ（郵貯利用可）の設置
- 10）マルチメディア端末：「Ｌoppｉ」設置  
各種チケット販売等  
入学願書・大学資料等の取り寄せ  
公開講座等の申し込み・支払い  
受験料等の支払い  
国内航空券の予約取次ぎ業務



## 訃報

このたび、<sup>くら た みち お</sup>倉田道夫名誉教授、<sup>い し ぐ る た け お</sup>石黒武雄名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に両名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

## 倉田 道夫 名誉教授



倉田道夫先生は9月10日逝去された。享年79。

先生は、昭和22年9月東京工業大学応用化学科を卒業され、東京大学大学院特別研究生、京都大学工学部特別研究

生修了後、京都大学工学部講師、助教授を経て、同37年京都大学化学研究所教授に就任、高分子構造研究部門、材料物性基礎研究部門を担当され、高分子物理化学の研究に従事された。昭和63年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和61年4月から2年間、京都大学化学研

究所所長および京都大学評議員として、本学の管理運営に貢献された。本学退官後は、昭和63年より7年間、三菱瓦斯化学株式会社顧問を務められた。

先生は、高分子の構造と物性に関する理論的・実験的研究において数多くの業績を残され、この分野の発展に大きく貢献された。主な著書に『高分子の物理（共著）』、『高分子溶液の理論』等がある。先生は、高分子学会理事、日本レオロジー学会会長などを歴任され、高分子研究の発展に貢献された。これら一連の研究教育活動、学会活動により、平成14年11月勲二等瑞宝章を受けられた。

（化学研究所）

## 石黒 武雄 名誉教授



石黒武雄先生は、10月9日逝去された。享年100。

先生は、昭和4年東京帝国大学医学部薬学科を卒業、同大学助手、同大学助教授に任ぜられた。昭和12年11月京都

帝国大学助教授に転任し、医学部薬学科の新設に協力し、同16年4月京都帝国大学教授に任ぜられた。

昭和34年10月京都大学教授を退職、同年同月京都大学名誉教授の称号を受けられた。昭和34年11月第一製薬株式会社常務取締役役に就任、専務取締役を経て同38年5月同社社長に就任するなど学界のみならず業界及び財界の発展にも貢献された。

先生は、有為な人材を多数輩出するとともに、研究面では天然物の成分、医薬品製造原料および、薬品物理化学の研究などで百余編の学術論文を発表し、これらの研究によって薬学博士の学位並びに日本学術協会賞及び日本薬学会学術賞を授与された。また、トランサミンの製造技術を開発して毎日工業技術賞及び大河内賞を受賞されるなど、薬学及び薬業の発展に多大な貢献をされた。さらにまた、日本薬学会会頭など学会の役員として薬学の発展に寄与された。

このような永年にわたる教育、研究、製造、普及を通じて国民の健康増進に尽くした功績から、昭和49年勲三等旭日中授章を授与された。

（大学院薬学研究科）



## お知らせ

## 能楽鑑賞会

課外教養行事の一環として、日本の伝統芸能の能楽鑑賞会を以下のとおり企画しました。本学学生・教職員各位におかれましては、是非この機会に狂言と能楽を堪能してください。

来場をお待ちしております。

1. 日 時：12月8日（水）開場：18：00  
開演：18：30（開演後の入場はご遠慮願います。）  
終演：20：30（予定）
2. 会 場：京都観世会館 京都市左京区岡崎円勝寺町44 TEL 771 - 6114  
（東山仁王門を東へ約300メートル）
3. 演 目：狂 言 <sup>ネ オンキョク</sup>寝音曲 茂山 七五三  
茂山 千五郎 他
- 能 楽 <sup>カゲ キヨ</sup>景 清 <sup>ショウモンノアシライ</sup>松門之会釈 片山 九郎右衛門  
植田 隆之亮 他

備 考 1. 入場無料（入場の際は、学生証又は職員証を提示してください。）

2. プログラムは当日に会場で配付します。

3. 定員は550名先着順とします。

4. 問い合わせ先：学生部学生課課外教養担当 TEL : (内線) 2511 又は 2588

（学生部）

## 化学研究所 第104回研究発表会

日 時：12月3日（金）10：00～17：40

場 所：化学研究所 共同研究棟

午前の部（10：00～11：55）

- 10：00～10：05 挨拶 所 長 高野 幹夫
- 10：05～10：35 細胞の生死を制御する分子機構 （分子臨床化学） 田中 静吾
- 10：35～11：05 糖鎖データベースからのデータマイニング  
（プロテオームインフォマティクス） 馬見塚 拓 ほか
- 11：05～11：15 第9回化学研究所『所長賞・奨励賞』授与式
- 11：15～11：45 所長賞受賞講演 環構造を用いたオリゴシランの立体配座制御  
（典型元素機能化学） 辻 勇人
- 11：45～11：55 奨励賞ポスタープレビュー 2件  
ポスターセッション （13：00～14：50）67件 [於 共同研究棟 ライトコート]

午後の部（15：00～17：40）

- 15：00～15：30 酵素の構造とメカニズムを探る阻害剤設計 （生体触媒化学） 平竹 潤
- 15：30～16：00 四鉄骨格上でのアセチレン2分子の段階的臭素化反応  
- プロモアセチレンおよびジプロモアセチレン配位錯体の生成と反応性 -  
（遷移金属錯体化学） 岡崎 雅明

|                   |  |       |
|-------------------|--|-------|
| 16 : 00 ~ 16 : 30 | アクリロニトリルクラスターイオンの固体基板上への堆積<br>(分子集合解析) | 吉田 弘幸 |
| 16 : 30 ~ 16 : 40 | --- 休 憩 ---                            |       |
| 16 : 40 ~ 17 : 10 | 固液界面における結晶成長と加工<br>(複合ナノ解析化学)          | 根本 隆  |
| 17 : 10 ~ 17 : 40 | 電子リングKSRにおけるビーム物理<br>(粒子ビーム科学)         | 白井 敏之 |

参 加 費 : 無料 (申込不要)

問い合わせ先 : 化学研究所担当事務室 TEL : 0774 - 38 - 3344

詳細は化学研究所ホームページをご覧ください。

[http://www.kuicr.kyoto-u.ac.jp/index\\_J.html](http://www.kuicr.kyoto-u.ac.jp/index_J.html)

## 公開シンポジウム「21世紀の不安とあやかし」

カウンセリングセンター・保健管理センターの共催により公開シンポジウムを開催しますので、多数ご来聴ください。

1. 日 時 : 12月10日 (金) 13 : 30 ~ 16 : 30
2. 会 場 : 百周年時計台記念館 国際交流ホール (スロープ・エレベーター有)
3. 挨拶 : カウンセリングセンター長 岡田 康伸
4. 報告者と演題 : 「現代の異界と妖怪退治 - 民俗学の立場から考える - 」  
国際日本文化研究センター 教 授 小松 和彦  
「現代学生の不安とそのあらわれ」  
京都文教大学大学院臨床心理学研究科 教 授 濱野 清志

人が未知なる異界に接し、そこで生じる混沌・恐怖などの怪異に距離をとり対象化しようとした時、「異人」や「妖怪」がたちあられるという。現代の私たちは、世界の境というものをどこに感じとり、見いだしているのだろう。そして了解できない怪異に「妖怪」という名前を付けなくなった私たちは、何と呼び、どうつきあおうとしているのだろう。

民俗学と臨床心理学の両面から先生方にお話を聞かせていただき、21世紀に生きるなにがしかのヒントを得る助けとしたい。

5. 司 会 : カウンセリングセンター講師 中川 純子
6. 入 場 料 : 無 料 (事前申込不要)
7. 定 員 : 100名
8. 問い合わせ先 : カウンセリングセンター TEL : 753 - 2515  
詳細はホームページをご覧ください。  
<http://www.kyoto-u.ac.jp/counseling/publicsympo2004.html>

京都大学カウンセリングセンター  
京都大学保健管理センター 共催

## 再生医科学研究所平成16年度学術講演会

日 時：12月17日（金）

講演会：10：20～16：50，懇親会17：00～19：00

場 所：芝蘭会館稲盛ホール

（京都市左京区吉田近衛町京都大学医学部構内北側 TEL 753 - 9336）

## 演題及び講師：第1部

「ヒトES細胞株の樹立と再生医学」

助教授 末盛 博文

「エバネッセント光を用いた材料表面への

細胞接着過程の解析とその細胞アレイへの応用」

教 授 岩田 博夫

「間葉系幹細胞を用いた再生医療の基礎と応用」

教 授 戸口田淳也

## 第2部

「間葉の血管化制御と血管新生抑制因子」

教 授 開 祐司

「関節軟骨の表面構造と潤滑メカニズム」

教 授 池内 健

「タンパク質はどのように作られ、どのように壊されるのか？」

教 授 永田 和宏

## 第3部

「発生過程での幹細胞，リンパ球の動態制御とケモカイン」

CXCL12（SDF - 1 /PBSF）

教 授 長澤 丘司

「Tissue Engineering とその臨床応用」

助教授 中村 達雄

「シミュレーション医工学の研究状況」

教 授 堤 定美

「形態形成におけるADAMプロテアーゼの役割」

教 授 瀬原 淳子

参 加 費：無料（来聴歓迎，事前申込不要）

但し，懇親会に参加される場合は申込（FAX・E-mail），参加費3千円が必要です。

問い合わせ・懇親会申込み先：

再生医科学研究所学術講演会事務局

FAX：751 - 4646 E-mail：shomu@frontier.kyoto-u.ac.jp

詳細は再生医科学研究所ホームページをご覧ください。

<http://www.frontier.kyoto-u.ac.jp/index-j.htm>

## 編集後記

京大のホームページが，京都のホームページコンテストで賞を取ったそう。ホームページに限らず，学外向けの広報誌なども充実して，京大からの情報発信は以前に比べて格段に活発になった。おかげで内部にいる私たちにも学内にどんな研究者がいるのかがとてもよくわかる。けれども，できればもっと力を入れてほしいと思うことがある。それは，ポスドクや大学院生などの「若手研究者」の研究や活動を紹介することだ。何しろ，実質的な研究の相当な部分が，いわゆる「先生」たちではなく，彼ら若手によって担われているのだから。

（加藤記）